

理的な純粹さを保持してきた西方教会からフランク人を中心とした十字軍が派遣されることは、「神の業」に他ならないと主張するのである。しかし、ギベールの東方教会への憎悪と敵対心は、彼個人に限られるものではなく、当時の西欧世界が共有するものであった。

第二に、ギベールは、ムハンマドとイスラームに関して、文書資料ではなく、おそらく十字軍遠征から帰還した人々がもたらした口頭の情報から得ており、その中には、一二世紀初頭としては正確な情報もわずかに含まれていたが、大部分は著しく歪曲されたものであった。しかし、彼はムハンマドに関する悪評の真偽を問わず、ただ悪人と決めつけ、正確な情報を得ようとはしない。西欧の中世世界は、このように歪曲されたムハンマド、イスラーム像を修正することはなかった。

第三に、これとの関連で、ギベールがムハンマドの宗教をキリスト教とは異なる宗教と見なしたのか、それとも、キリスト教の異端と見なしたのが問題となる。実際、本書においては、ムハンマドに「異教徒」(Pagani, gentiles)という語が使用されているからである。原則的には、彼は、ムハンマドを、東方教会の墮落から生じた、アリウス派にも匹敵する新たな異端と見なしていたと思われる。つまり、「異教徒」という語は、彼の異端性と東方教会の墮落をより強調するために用いられているのである。

最後に、ギベールが東方教会を誹謗する際、無酵母パンと酵母パン、三位一体の問題を持ち出すが、この点について述べておくことがある。彼は『自伝あるいは孤独な歌』(De Vita sua

sive Monodiae)の中で、若い頃、当時はまだベツクの副修道院長だったカンタベリーのアンセルムスから教えを受けたことを記している。このアンセルムスは、無酵母パンと酵母パンの問題について、それを「人間の考えの多様性」(humanorum sensuum diversitates)とし、寛容の姿勢を示し、また聖霊の発出(Filioue)の問題についても、『聖霊の発出について』を執筆し、東方教会に対して、西方教会の立場を理性的論証と聖書解釈によって弁明した。ギベールは無論このことを知らない。またアンセルムスは、神学的な名著『神はなぜ人間となつたか』において、ユダヤ人、異教徒もキリスト教徒と同等に理性を有している以上、受肉の理性的根拠を探索し、ある程度は理解することができるといふ確信を表明した。ギベールも、『受肉について…ユダヤ人を論駁する』(Tractatus de Incarnatione contra Judaeos)を執筆しているが、この点に関する両者の関係については、今後の検討の課題としたい。

ラテン人への憎悪を超える

——ベツコスの転向について——

橋 川 裕 之

一二八五年二月五日、ビザンツ帝国の首都コンスタンティノープルにおいて、終結まで半年を要することになる、重大な会議が開催された。この会議には皇帝アンドロニコス二世パレオロゴス(一二八二—一二八八年)とコンスタンティノープル総

パネル

主教グリゴリオス二世（一二八三—八九年）のほか、主教や修道士を含む聖俗の有力者が大勢出席した。本報告で注目したのは、この会議の開催を希望し、被告として裁かれた人、ヨアンニス・ベッコスである。彼は一二七五年五月から一二八二年二月までコンスタンティノール総主教の位にあったが、アンドロニコスの父、ミハイル八世（一二五九—八二年）の死後に辞任し、その後は小アジア西北の都市ブルサの修道院に幽閉されていた。同時代の高位聖職者であり、ミハイルとアンドロニコスの治世について浩瀚な史書を著したゲオルギオス・パヒメリスによれば、討議においてベッコスは自らの行いを次のように釈明した。

我々は軽率さを告白しますし、赦しを求めます。実際、あのように語る欲望が我々に訪れたのは、空疎な好奇心によるのでは決してありません。一つの理由が我々を刺激したことによるのです。それは教会の分裂を解消させるという思いです。彼らは「から^ε」を用い、我々は「通して^{δια}」を用いるが、両者はそれを神学の同一の点に対して用いている。我々があのように語るよりほかに、一致をなすことはできなかったのです。

ベッコスがその協力者であった二人の宮廷聖職者とともに出頭を命じられたのは、彼らがミハイルの治世に実現した教会合同の中心的な支持者であり、また、一二八二年暮れにミハイルを継承したアンドロニコスが合同政策を放棄したためであった。ミハイルは自らが統治する帝国を西欧勢力、とりわけシャルル・ダンジュの攻撃から保護するため、久しくシスマの状

態にあったローマ教会とビザンツ教会の合同を模索し、一二七四年に開催された第二リヨン公会議において合同を実現することに成功していた。しかし、この合同は帝国においてほとんど支持者を見出せなかったばかりか、深刻な神学論争を生起させることにもなった。合同支持派の総主教としてベッコスが問題にしたのは、聖霊の父と子の双方からの発出を説く、ローマ教会のいわゆるフィリオクエの教義である。ベッコスはこれを正統教義と認める論陣を張っていたのである。ベッコスは一二八五年の会議においても自説を粘り強く主張したが、総主教グリゴリオスは会議を八月に閉じ、自ら著した決議文書（トモス）により、ベッコスを異端者として断罪した。

教会合同の成立を機に本格化した、ビザンツ国内のフィリオクエ論争には、研究者を悩ませてきた一つの問題がある。それはヨアンニス・ベッコスの獄中での転向である。パヒメリスによれば、ベッコスは総主教座教会（通称、大教会）に勤務する高位聖職者であったとき、皇帝が総主教以下の聖職者に合同の大義を納得させるべく開いた会議において、合同への反対を公然と表明したため、皇帝の怒りをかい、ブラヘルネ宮殿内の牢獄に投じられた。その後、ベッコスは牢獄にあつて合同の支持者に転向したのである。教会合同を神学の面でも強く支持した総主教ヨアンニス・ベッコスは、かつては確信的な反対派だったのである。彼は獄中で、なぜ自身の見解を根本的に改めたのであろうか。彼の転向とその後の活動は、何を意味するのであろうか。報告者は、このベッコスの転向の要因と意味を、東西のキリスト教世界の関係の歴史、より具体的には、教会の合同

と平和をめぐるビザンツ知識人の深まるジレンマという文脈で把握することを試みた。

近世初頭における「異教」との邂逅

——ピコの場合の意義と境界——

比留間 亮 平

一四〇一六世紀にかけてルネサンス人文主義運動がイタリアから北ヨーロッパへと広がっていくにつれ、それまでの西欧ラテン世界で失われていた、あるいは名前のみが知られていた古代の文献が次々に発見され、翻訳、印刷されていった。それによって古代の異教世界に関する知識と関心は飛躍的に高まっていったが、そのようなキリスト教以外の知的・宗教的伝統とキリスト教との関係をどのように理解するのかわという問題が生じてきた。ピコ・デラ・ミランドラ (1463-1494) の思想も、そのような試みの一つとして位置づけることができる。ピコは、古代のピタゴラス主義やヘルメス主義、ゾロアスター教やオルフェウス教、それにユダヤ教やイスラム教も含めた、古代から盛期スコラ主義の時代まで連綿と続く人類の知的営為をまとめたる種の宗教史・哲学史を構想した。そしてピコはそれに一貫して共通するある宗教哲学を見いだすことで、彼の言う「哲学的平和」を構築しようと努めた。ピコにおいて特筆すべきなのは、彼がラテン語、ギリシャ語のみならずアラビア語やヘブライ語までも学習し、イスラム、ユダヤの原典に沈潜してその

宗教思想を自家薬籠中のものとしていたという点である。これは一五世紀当時において極めて画期的なことであった。

キリスト教以外の宗教的伝統に対するピコのこのような好意的な態度には、彼のある特異な歴史理解が反映されている。ピコによれば、古代において宗教哲学は極めて調和的で完全な知恵を伝えるものであったが、時代が下るにつれてそれはアカデメイア派、ペリパトス派に代表されるような諸学派に分裂していき、徐々に不均衡で不完全なものとなっていった。そしてアラビア哲学を経て西欧に誕生した当時のスコラ哲学に至っては、諸学派が互いに罵り合う悲惨な状態に陥ってしまったとされた。このような宗教史、哲学史理解に基づき、ピコは当時のスコラ哲学とキリスト教に、古代における真の叡智と宗教を取り戻そうとした。キリスト教以外の宗教的伝統についても憶見なく学び、その知恵を同時代の人々にも広めようとした。ピコの試みは画期的なものであり、「調和の君主 *princeps concordiae*」としての彼の名声を確固たるものとした。

しかし、このピコの「調和」の試みにも大きな問題があることは否定できない。まずその方法論的な問題であるが、ピコは諸宗教、諸哲学の根本的な一致、調和を強調するあまり、それらが用いる用語、概念の間にある差異を完全に無視してしまっている。また、他の宗教的伝統の教説をキリスト教と調和させようとするピコの試みは、当然ではあるがキリスト教の側に立脚するものであり、その目的として異教徒と対話すると言うよりも、それを改宗させようとするものとなっている。ピコはユダヤやイスラムの宗教思想の価値を高く評価しながらも、それ